

# 令和三年度日本文学科フィールドワーク成果報告

## ——フィールドワークの事前指導から 実地踏査、事後学習まで——

藤本真理子 畠田 桜和  
山岡 瑞穂

### はじめに

尾道市立大学日本文学科では、「日本文学研究と文芸創作に結びつく実地踏査をおこない、机上の学習では得られない資料収集や調査研究能力を養う。また、事前学習と事後学習をとおして、企画立案能力と報告能力を身につけながら、歴史学・民俗学・日本語学および日本文学等の点からも広く日本文化について学習する」という目標にもとづき、三年生以上の学生を対象に、「フィールドワーク実習」の授業を開講している。しかし、二〇一九年度より続く新型コロナウイルス感染症の拡大防止の対策をと

る中、実地踏査を学びに入れた学修の実施には、さまざまな条件を課した上でのこととなった。

この報告は、その状況下で、どのような危機管理対策のもと学外実習を実施したかという記録と、どのようなプログラムで事前学習を行ったかを示す。さらに、履修者が事後学習で提出したフィールドワークの報告レポートの内容を紹介し、そのうちの数点をこの報告用にまとめ直した形で掲載する。

令和三年一〇月三〇日(土)～二月二三日(木)にかけて、日本文学科関連科目「フィールドワーク」の実地踏査を実施した。その時点で、一度、実

地踏査期間を延期していた。当初は九月一三日(月)～一七日(金)の予定であった。これは、本学での「新型コロナウイルス感染症による活動制限指針(当時)」レベル1未満でなければ実施が難しいであろうことをかんがみていることである。実施日自体はレベルの判定の端境期ではあったが、同じレベルであっても、感染状況が下がり傾向にあるレベルか上がり傾向にあるレベルかということで動きを決めた。

さらに、実施にあたっては、大学での感染対策にしたがい、次の内容を危機管理対策会議に提出し、実習の申請を行った。

○実施に際しての危機管理上の注意点(新型コロナウイルス感染症防止対策として)

・履修者は、体調管理を徹底する。大学の健康観察への回答を必須とする。フィールドワーク前7日間、当日、後7日間は健康観察項目入力に加えて備考欄を利用して行動履歴(移動市町村、フィールドワークの同行者)を入

力することとし、授業担当教員はフィールドワーク前7日間と当日の健康観察が「回答済み」であることを学生からのポータルアンケート画面送付等により確認する。なお、実習中に急な体調不良者などがあった場合は、状況によって実習を途中でとりやめる。

・履修者は、マスクを着用して行動する。

・履修者は、実施後すみやかに、実習報告書をまとめ、提出する。

・実施後、体調不良を感じた場合、履修者はすみやかに大学に連絡をする。

主な探訪先は島根県出雲市とし、年度初めに第一回説明会をおこない、実施留意点を履修希望者に周知した。以後、事前学習として、計三回の講義(金曜日五限目)に加え、情報交換と調査研究テーマの絞り込みの場として、七月下旬から八月月上旬に三日間(一日は予備日)の勉強会をもうけた。また実施後、事後学習として、レポートの提出をもとめ、その後、希望者を中心に成果報告集を作成した。

以下にシラバスからの変更点、事前・事後学習の内容、およびフィールドワークの調査研究テーマ(研

究・創作)の成果を報告する。

〈実習実施者および各実施先〉

四年生2名、三年生20名

広島県安芸高田市・三次市、愛媛県大洲市ポコペン横丁・おはなはん通り、愛媛県今治市、広島県廿日市市宮島町、岡山県岡山市吉備津神社・

吉備津彦神社、岡山県井原市井原鉄道、広島県

三次市三次町ものけミュージアム、広島県尾道市瀬戸町生口島、広島県福山市鞆町、広島

県尾道市向島

〈今年度の科目指導教員〉

藤川功和、光原百合、藤本真理子

〈事前学習講師〉

本学教員・藤井佐美、平山直樹、灰谷謙二

学外講師・小泉凡氏

〈実地踏査の監督教員〉

藤川功和、藤本真理子、灰谷謙二

## シラバスからの変更点

	原案	修正案
行動人数	履修者全員での行動あり	5人以下
実施日数	2泊3日	1日(5時間程度までを目安に)
行く先	島根県出雲市	日帰りでの行動が可能な範囲

## 調査テーマ

### 〈研究〉

桃太郎伝説―桃の効果を訪ねて―、司馬遼太郎「街道をゆく」の足跡をたどる―芸備の道三次市・安芸高田市―、井原鉄道と線路周辺について、井原鉄道とその周辺についてのオリジナルマップ作り、井原鉄道沿線調査に伴うオリジナルマップの制作について、歴史と鉄道と地域のつながり―井原鉄道と路線周辺について―、井原鉄道―オリジナルマップを作ろう―、井原鉄道と線路周辺について、

井原鉄道マップ、〈観光客に対する宮島の食文化について〉、宮島の食について

### 〈創作タイトル〉

おかやま温羅・モモヒメ物語、海沿いに揺れる町で、いろは丸と女の子、瀬戸の夕風（ゆうなぎ）が包む 国内随一の近世港町くセピア色の港町に日常が溶け込む鞆の浦く、白い鳥がはばたくところに、秋のみちゆき、『瀬戸田の芸術に触れて「朝に見る夢」・「空のいつもと違う朝」・「未来予想図は光色」・「放課後の海と僕」』（四人の連作）、―連作短歌―「言葉の波戸場」

### 事前学習の紹介（１）

計三回のオンライン事前学習（二回の講義）では、ゲスト講師として本学で民俗学をご担当の藤井佐美先生、本学で日本語学をご担当の灰谷謙二先生を招いておこなった。フィールドワークを軸に研究を進めてこられた先生方に、実際の調査での話をうかがいたく企画した。

藤井佐美先生には、「★フィールドワークの方法 ―見て歩く、聞いて歩く、調べて歩く―」と題して、五月二一日（金）の回をご担当いただいた。講義では、フィールドワークを研究に取り入れる際に注意しておくべき、事前の確認や準備、調査時の注意点、事後の情報整理の必要性などを、先生自身の体験談を交えながら教えていただいた。さらに、実地調査からどのようなことが見えてくるかというのを、尾道市街の通りを例に、現在の観光地図と江戸時代頃の古地図を用いてご紹介くださった。

灰谷謙二先生には、「言語系フィールドワークの具体的なことについて」と題して、七月一六日（金）の回をご担当いただいた。講義では、実際のフィールドの紹介や、各地での方言調査にまつわるお話をいただいた。またそのほか、グループ調査の基本についても方言調査を例にご紹介いただいた。これらを受け、実習をグループで行った学生もおり、実地先で会った人に質問や調査をした学生もいた。

### 事前学習の紹介（２）

事前学習では、（１）で紹介したフィールドワー

クの方法について学ぶ講義のほかに、実地調査の予定先であった島根県松江について学ぶ機会を設けた。これには、小泉八雲記念館館長・島根県立大学短期大学部名誉教授の小泉凡先生をゲスト講師としてお招きし、九月一三日（月）の一七時から一時間半、文学と地域との関りについて「小泉八雲と神々の国の首都く443日の軌跡を追って」と題してお話しいただいた。九月一三日（月）の一七時から一時間半を設定した。フィールドワークは本来、宿泊等、いつもの学修とは少し異なる時間や空間をもにすることもその醍醐味であろうということから夕刻に設けることとなった。

また、このご講演に先駆けて、松江の紹介を兼ねた事前学習を六月一八日（金）に行った。担当は、科目指導教員であった光原百合と、松江に居住歴のある本学の平山直樹先生の二名で、平山先生からは、「松江のあれこれについて、少しだけ住んだことがある人から」と題して、松江市に居住されていたときの体験が語られた。また、光原先生からは、「松江と尾道との注目すべき共通点・相違点」と題して、小泉八雲の紹介に加え、松江の名所についてもご紹介くださった。

## 事後学習の紹介

事後学習では、履修学生は研究か創作のいずれかを選び、各自のテーマにもとづき、レポートまたは創作を作成し、二〇二二年一月二〇日（木）を締切として提出した。また、この提出されたレポート・作品なども取り込んだ報告集を作成した。

### 〈レポート紹介〉

ここでは、フィールドワーク実習で提出されたレポート二点について、提出時から一部修正を加えた形で、取り上げる。

#### レポート紹介

●タイトル…

司馬遼太郎「街道をゆく」の足跡をたどる

— 芸備の道 三次市・安芸高田市 —

●氏名…畠田桜和

●レポート内容…

〈調査の目的〉

本フィールドワークでは、司馬遼太郎の紀行文集

『街道をゆく 第21巻 神戸・横浜散歩、芸備の道』  
において、司馬が訪れた広島県安芸高田市・三次市  
の足跡を辿る。司馬が訪れた、現在から約50年前の  
現地の名残や変化を確認する事を目的とした。

今回は主に、地名、資料館や寺院、古墳などの変  
化に着目して当時との比較を行った。

〔調査内容の一部抜粋（岩脇古墳の変化）〕

岩脇古墳ではシルバー人材センターの方がお2  
人、草刈りを行っていた。お2人に伺ったところ岩  
脇古墳の整備は三次市からシルバー人材センターに  
一任されているらしく、若者の手がないと生い茂っ  
た草木は処理のしようがないようだった。

『街道をゆく』では、岩脇古墳は次のように描写  
されている。

「この古墳は、古墳の宝庫ともいえる三次盆地  
にあつては数ある古墳の一つにすぎない。しか  
し途中の道もよさそうだし、外観もよく保存  
されているようだから、この古墳なら草木を踏  
みわけて歩く必要はなさそうであつた。（中略）  
このあたりを、市は「古墳公園」をいう名称の  
もとに、美しく管理している。登るにつれて  
足もとに三次の町並がひらけてきて、墳丘の上

に立つと、一望に見はるかすことができた。春  
は野遊びにくることができないのではないか。な  
ににしても古墳一基を核にして芝生と樹木を按  
配しつつこのように小公園をつくるというの  
は、三次市の能力のすぐれたところかもしれない。  
い。」

岩脇古墳は、司馬が管理の美しさを賞賛していた  
地であつたために、実際の姿を見ると大きく変わ  
果てていると感じた。霧が立ち込める時間であつた  
事もあるが、墳丘の上に立つても木々が生い茂つて  
おり、三次の町並みを「一望に見はるかすことがで  
きた」とは思われなかった。

〔調査内容や結果考察〕

本フィールドワークを通して、約50年前に司馬が  
訪れた当時と、現在の安芸高田市・三次市の相違を  
見ることができた。当時とほとんど変わらない姿が  
確認できたのは、幕末からの名残がある地名と博物  
館の存在、高林坊という寺院の雰囲気だった。特に、  
当時私宅を一般向けに公開していた元町立吉田資料  
館（現安芸高田市歴史民俗博物館）は、当時よりも  
規模が大きく多くの人が訪れる立派な建物になつて  
いた。一方で大きく変化したのは、市が管理する古

墳公園の在り方であった。公的な組織の管轄だからこそ、人足が絶えた土地の整備には予算を割きづらくなつたのではないかと推測できる。同じ観光マップに載っている地点でも、実際に訪れる事でしか感じられない管理者や観光客の実情があると確認できた。本フィールドワークのように、時を隔てたひとつの紀行文を題材に各地を訪れると、同じ年月が流れているにも関わらずそれぞれの異同は多様であると実感する。現在は注力して管理されている事物も、時が経つと変わり果てている可能性がある、という危機感を感じる契機になった。



レポート紹介

- タイトル・桃太郎伝説―桃の効果を訪ねて―
- 氏名・山岡瑞穂
- レポート内容・

岡山市の吉備路ガイドブックに記されている桃太郎伝説では「桃の実には邪悪なものを振り払う力」「靈力」があったと記されている。本レポートでは作品内での桃の効果と実際に販売されている桃のお守りの効果について確認した。このことにより、実際のお守りも伝説と関連付けられた説明がされているのかどうか、桃である理由、一般にどう桃が広められているのかを明らかにしたいと考えた。

桃のお守りは岡山で桃太郎を祀っている、吉備津神社と吉備津彦神社の両神社で見られた。桃太郎伝説を明示する場合は少なく、桃そのものの力として災いを除ける効果が期待されていた。「古来」、桃に備わる力だという説明が神社でされていたが、何を指すのかは明示されなかった。その他の相違点や類似点から作品もお守りも様々ある要素から選び取られて、作られていると考えられた。桃のイメージ付けや桃太郎伝説を明らかにするためには「古来」としか説明のされなかった昔から続く桃の役割りに

いて調べを進めることが求められる。  
表は、それぞれの神社で見られたお守りについてまとめたものである。右が吉備津神社、左が吉備津彦神社。

桃の腕輪守り	桃石守り	開運厄除白陶器製
災難除け守り	魔除け、縁結び	開運厄除
災難除け	性健康、協調	開運厄除
古来、桃が魔除けの果実であること、常に身に着けておくべきことが記されていること	右に同じ	「邪気を祓い、厄を除けてくれます。」とされること
効果については桃の形に言及はなく石の効果がかけられている。	説明文なし	
交通安全・学業成就（シール）	平穩無事、幸運招福	桃太郎が難題に機転を利かせ応える場面と大吉備津彦大神が知恵・学業の守り神であること
交通安全・学業成就より交通安全	懐御守である	
効果	「おかやま桃太郎ものがたり」吉備津彦と温羅」との共通点	お守りについて備考



## 参考文献

阿村礼子・作、夏目尚吾・絵 「おかやま桃太郎もの

がたり〜吉備津彦と温羅〜」

[https://static.okayama-ebooks.jp/actibook\\_data/20140613\\_kibit\\_suhiko\\_ura.jp/HTML5/pc.html#/page/1](https://static.okayama-ebooks.jp/actibook_data/20140613_kibit_suhiko_ura.jp/HTML5/pc.html#/page/1) (最終閲覧日二〇二二年一月二〇日)

## 〈ファイルドワーク報告集〉

履修学生のうち希望のあった学生を中心に令和四年三月に報告集を作成した。実習を踏まえて作成した鉄道図や、報告会を仮定して準備したパワーポイントなどを掲載した。

## まとめ

本報告では、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の対策をとる中で、学外学習をどのように実施し、どういった成果が得られたかについて述べた。実習が通常通りとはいかなかった中、事前学習の講義や実習計画書の作成、成果の共有、報告集の作成など

をとおして、実習授業を運営した。履修者が感染防止対策を徹底して実施してくれたおかげで、実習も無事に行程を終えることができた。

—ふじもと・まりこ 日本文学科准教授—  
—はただ・さわ 日本文学科卒業生—  
—やまおか・みずほ 日本文学科卒業生—